

# 「いじめ」や「ハラスメント」を経験した 子ども時代の社会的影響 —日本と中華人民共和国の比較—

平塚儒子

**要旨** いじめやハラスメントに現れる諸行動とストレス兆候を調査し、比較した。日本では出生年代別に見ると、1990年代にいじめの経験のあるものの割合が大きく、1990年生まれでは男子の50%、女子の60%に経験があった。その後、両者とも割合は低下した。

「いじめの経験のある者」の中の「不登校や引きこもりの経験のある者」や「心配事があって眠れない者」の割合は「いじめの経験のない者」のものより有意に大きかった。

いじめやハラスメントを目撃した場合の対応の出生年代別変化、及び、「心配事があって眠れない者」におけるいじめやハラスメントを目撃した場合の対応に関して、日本と中華人民共和国での調査結果を比較した。

**キーワード**：いじめ、ハラスメント、出生年代別変化、不登校、引きこもり、心配事、不眠

## 1. はじめに

日本の集団志向型と第二次世界大戦後の発達は、日本は他の国々に比して、特殊な状況にあった。第二次世界大戦の敗戦時にアメリカの力によって、「イエ」は壊された。しかし集団志向型社会の「イエ」は壊されたが、日本人がその代理として求めたのが「会社＝カイシャ」である。自分の所属する「カイシャ」の永続を信じることによって、自分のアイデンティティが得られた。日本の経営者は年功序列、終身雇用、新卒採用、企業内教育・福祉等を特徴とする「日本的経営」という、イエ型集団の特性を産業社会に適合させた企業組織を創り出し従業員に強い帰属感を与え、彼らの忠誠心と自発心を引き出すことに成功した。そして、その成果として現在の日本企業の経済的成功があった。日本は経済の発展を成し遂げたものの、経済的には諸外国と対抗する中で、グローバリゼーションの波にさらされて、日本的なものは異質なものとなった。核家族化が進み、高齢化と少子化が進み、少子化になると、乳幼児の時代は、手をかけられたにもかかわらず、小学生や中学生になると周りの、おだてや、励まし、わざわざ「ほめる」という行為、これは明確な実績が伴わないと、称賛や承認が得られなくなる。近年は、そこで彼らは蓄積する不満を解消するために、自分よ

り下の存在を探し求めて、「自分より下」の存在を徹底的に打ち砕くことによって、萎縮した自尊感情を回復させるために、内面にため込んだ自尊感情を取り戻すために、殺傷行為にまで発展することがあると速水は表している<sup>1)</sup>。

現代の日本社会は、このようないじめによる自殺が社会問題となっている。いじめとは、暴力による生命・身体・自由・財産への侵害を継続することによって、あるいは、言葉による、仲間外れによって、名誉や精神的自由への侵害を通して、相手からコミュニケーション相手として真面目に扱われる権利を剥奪することによって、相手の人格を否定しようとする行為である。人権侵害を通して人格そのものを攻撃するところに、いじめの本質があり、それゆえに「いじめ」はつらいのである。

中華人民共和国では、1959年より61年は3カ年の天災（人災）があった。1966年より76年にかけて中国プロレタリア文化大革命期にあたり、北京に紅衛兵運動起こった。中国は長い間、家族第一主義だったが、毛沢東が、家族間の争いをやめさせ、国民のアイデンティティの基礎を置くことを意図して、文化大革命のときに家族内における密告を奨励し、家族の間でさえ、憎しみや恨みを生じさせた。毛沢東が失脚したために、国民の間にアイデンティティ喪失の危機が生じたとされている、結局頼れるのは「お金」だということになり、現在の中国の経済活動の活力を説明すると表している<sup>2)</sup>。

1949年10月、中華人民共和国の成立時人口は5億4167万人であった。これによって、生活の安定と改善、医療の向上によって、1969年には人口は8億671万人となった。その後1979年に急増対策として、少数民族は対象外として、改革開放を唱える鄧小平政策によって「一人っ子政策」が導入された。しかしながらその影響を受けた1980年代生まれの若者のことを「八〇後」といわれる若者は、一人っ子として親に甘やかされて育った彼らは、自由気ままで干渉されるのが嫌いで、ヒト付き合いも苦手である。その中国の宅男、宅女はコミュニケーションが下手で家にこもりがちで、そしてネットに依存しがちな人々とされ、彼らは「仕事以外の時間は出来るだけ家で過ごしたい」と考え、誰にも干渉されない空間で自由な時間を楽しむ方がよいというわけである。1978年からの改革開放の影響を受けた“新世代の若者”として注目されている。

中華人民共和国では、一人っ子政策では、急速な高齢化や男女比のアンバランスを引き起こしている<sup>3)</sup>。さらに戸籍登録のない子どもが生まれており、社会保障も義務教育も受けられない子どもは、中国全土で4000万人とも、数億人とも上がっているとされる<sup>4)</sup>。一人っ子第一世代は協調性や自立心に欠け、晩婚化やニートに伴った「社会的引きこもり」や「社会的脱落層」問題を引き起こしていると推測される<sup>5)</sup>。

本研究では、過去の研究成果として得られた、「いじめ」の関係を最もよく反映できる項目から構成した『いのちと心』のアンケート調査用紙を使用して、日本と中華人民共和国にて調査を行い、結果を比較した。

## 2. 調査の方法と内容

いじめやハラスメントに現れる諸行動とストレス兆候を把握するために、以下に示すような内容で『いのちと心』のアンケート調査用紙を作成した。本論文で報告する内容は、2010年に、日本では大阪府、岐阜県、長野県に活動の拠点が大学生と社会人の日常生活活動を行っている男女(n=600)、中華人民共和国では天津市に活動の拠点がある大学生と社会人の日常生活活動を行っている男女(n=470)を対象に調査したものである。本人の同意のもとに書面調査を行った。

調査から求めたデータは、1次集計の後、度数集計表を作成して $\chi^2$ 検定を実施し、有意確率5%で有意差があったものを採用した。

### 2-1 『いのちと心』のアンケートの内容

#### 設問1

あ)いじめやハラスメントを目撃したら通報する。

い)みんなの意見と違っていても、自分の意見を言う。

という2つの“基本的姿勢”に関して、自分の考えと実行している事を以下の4つから選びなさい。

- A) 良いことだと思うし、よく行っている。
- B) 良いことだと思うが、行わない。
- C) 良いことだと思わないが、行っている。
- D) 良いことだと思わないので、行わない。

#### 設問2

自分に関する以下の質問に“ハイ”、“イイエ”で答えなさい。

- 1) 私は、何をしたら良いか決められない。
- 2) 私は、同性の同じ年齢の子どもとグループをつくり遊んだ。
- 3) 私は、何かに思いきり打ち込んだり、挫折した経験がある。
- 4) 私の両親は、愛情を注いでくれた。
- 5) 私の両親は、正しく躾けてくれた。
- 6) 私は、遊びの参加が出来て、「嫌なことを拒否」ができる。
- 7) 私は、塾に通っていた、または通っている。
- 8) 私は、達成するために、自分に合った、ちょうど良い目標を選ぶ事ができる。
- 9) 私は、達成するために、簡単すぎる目標を選んでしまう。
- 10) 私は、達成するために難しすぎる目標を選んでしまう。
- 11) 私は、最も重要なことで、自分自身で達成したり、成功したりした経験がある。
- 12) 私は、自分以外の他人が何かを達成したり成功したりすることを観察できた。
- 13) 私は、自分に能力があることを言語的に説明されたり、言語的なはげましがあった。
- 14) 私は、生理的、情緒的高揚や、その他で気分がこうようすることがあった。
- 15) 私は、目標に向かって選んでいるという期待がある。
- 16) 不登校(学校に行けない)や、引きこもりの経験がある。
- 17) 生きがいがあり、自己実現(やりたいことをできるように努力している)。
- 18) 他人と相互援助(おたがいに、思いやって、たすけあう)経験をした。
- 19) いじめを経験した。
- 20) 自分から他人に働きかけることが繰り返しでき

る。

- 21) 他人に興味がなく、自分にも興味がない。
- 22) 友達を、なぐさめたり、助けてあげることがある。
- 23) ときどき、心配事があって眠れない。

### 設問3

以下の問いに“ハイ”、“イエ”で答えなさい。

1. 今、何をしたら良いか、決められない。
2. 不登校（学校に行けない）や、引きこもりの経験がある。
3. 自分で、何かを達成したり、成功した経験がある。
4. 小学生で、同じ年の、仲間たちとグループをつくり、遊んだ。
5. 生きがいがあり、自己実現（やりたいことを出来るように）に、努力している。
6. 他人と相互援助（お互いに、思いやって、たすけあう）経験をした。
7. いじめを、経験した。
8. 自分から、他人に働きかけることが、繰り返してできる。
9. 他人に興味がなく、自分にも興味がない。
10. 友達を、なぐさめたり、助けてあげることがある。
11. 他人の、成功を見たことがある。
12. ときどき、心配事があって眠れない。
13. 目標に向かって進んでいることが実感できる。

## 3. 結果

### 3-1 いじめを経験した者の出生年代推移（日本）

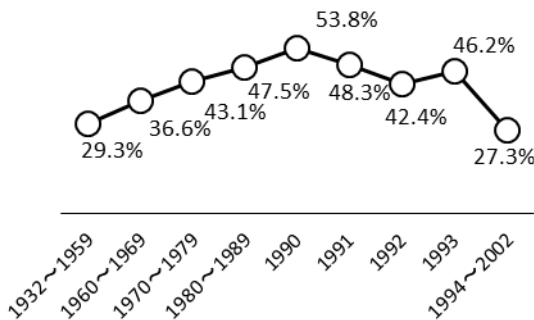


図1 いじめを経験した日本人の年代推移  
2012年日本人に対して平塚が調査（出生年代別）n=802.

結果が得られた被験者の出生年は1932年から2002年に亘ったが、図1ではいじめ経験者の出現割合を考慮して、出生年代を1932~1959、1960~1969、1970から199、1980~1989、1990、1991、1992、

1993、1994~2002年に分けた。

図1に示したように、いじめを経験した者の割合の最大は1990年(53.8%)で、次いで1991年(48.3%)、1980~1989年(47.5%)、1993年(46.2%)、1970~1979年(43.1%)、1992年(42.4%)、1960~1969年(36.6%)、1932~1959年(29.3%)の順で、最小は1994~2002年(27.3%)であった。

1990年代はバブル崩壊をきたし昭和60年代から続いた地価・物価の高騰が暴落して、平成不況のはじまりとなった。なお人口増加率は1%台と低下して、少子化が進行年代であった。

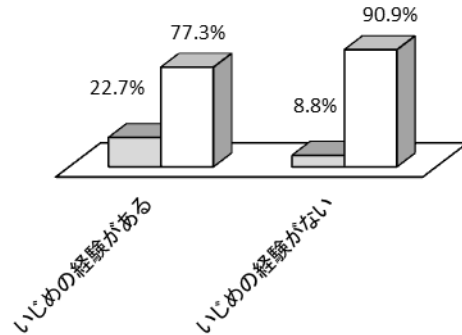


図2 いじめの経験の有無者と「不登校や引きこもりの経験」の関係。2012年日本人に対して平塚が調査 n=784、  
灰色：不登校や引きこもりの経験がある  
白色：不登校や引きこもりの経験はない

### 3-2 「いじめの経験のある者」と「不登校や引きこもりの経験」の関係（日本）

図2に示した様に、「いじめの経験のある者」の中の不登校や引きこもりの経験のある者の割合は「いじめの経験のない者」のものより大きく、一方、「いじめの経験のない者」の中の「不登校や引きこもりの経験」のないものの割合は「いじめの経験のある者」のものより大きかった。カイ二乗検定において有意差があった(P<0.05)。

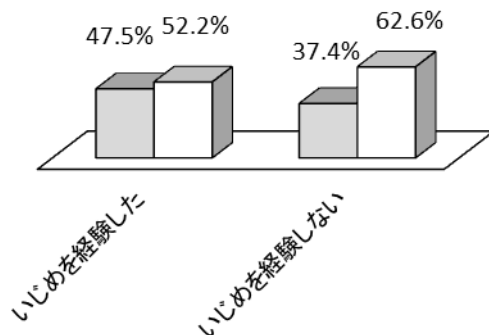


図3 「いじめの経験の有無」と「心配事があって眠れない」の関係、2012年日本人に対して平塚が調査 n=784、  
灰色：不登校や引きこもりの経験がある  
白色：不登校や引きこもりの経験はない

### 3-3 「いじめの経験のある者」と「心配事があって眠れない」関係（日本）

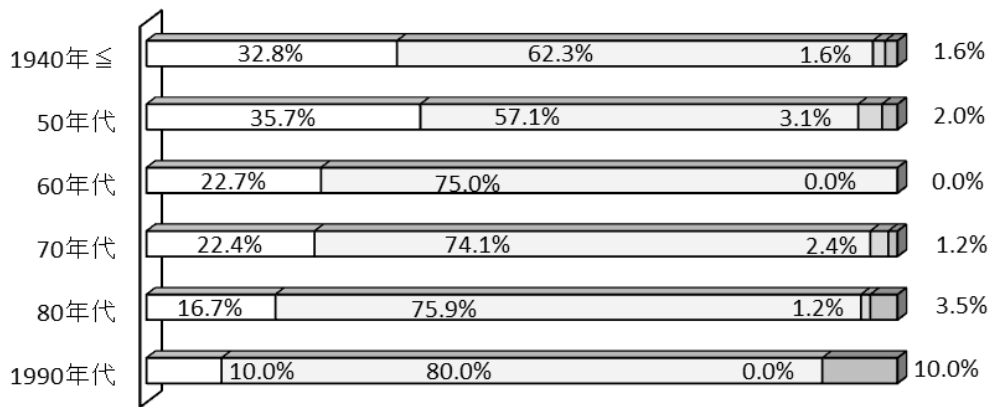


図4 日本の「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」出生年代別  
2012年日本の一般住民に対し平塚が調査 n=595

4段階を濃淡で、淡い方から順に、良いことだと思いきよく行っている、良いことだと思いが行わない、良いことだと思わないが行っている、良いことだと思わないので行わない

図3に示した様に、「いじめの経験のある者」の中の心配事がある眠れない者の割合は「いじめの経験のない者」のものより大きく、一方、「いじめの経験のない者」の中の「心配事がなく眠れる者の割合は「いじめの経験のある者」のものより大きかった。カイ二乗検定において有意差があった(P<0.05)。

### 3-4 「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」出生年代（日本）

図4に示したように、「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」ことに関する出生年代別集計において、「良いことだと思いきよく行っている」者の割合の最大は1950年代生まれであり、次いで1940年代、1960年代、1960年代、1970年代、1980年代の順で最小は1990年代であった。

「良いことだと思いが、行わない」ものの割合の最大は1990年代で、次いで、1980年代、1960年代、1870年代、1940年代の順で、最小は1950年代であった。少数ではあるが「良いことだと思わないので行わない」という回答もあり、その割合は1990

年代では10%、80年代3.5%、50年代2.0%、70年代1.2%、40年代1.0%の順であった。カイ二乗検定において有意差があった(P<0.05)。

### 3-5 「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」の出生年代別（中国）

図5に示したように、中国の場合の「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」ことに関する出生年代別集計において、「良いことだと思いきよく行っている」者の割合の最大は1970年代の75.0%で、次いで1950年代の50.6%、60年代の50.0%、80年代の37.7%、49年以上の36.6%の順で、最小は90年代の29.7%であった。

「良いことだと思いが、行わない」ものの割合の最大は1949年以上の61%で、次いで90年代の59.5%、80年代の50.0%であり、50年代の49.4%、60年代の49.1%の順で、最小は70年代の25.0%であった。

「良いことだと思わないが行っている」ものの割合の最大は1990年代の8.1%で、次いで80年代の2.7%、60年代は0.9%とわずかであった。

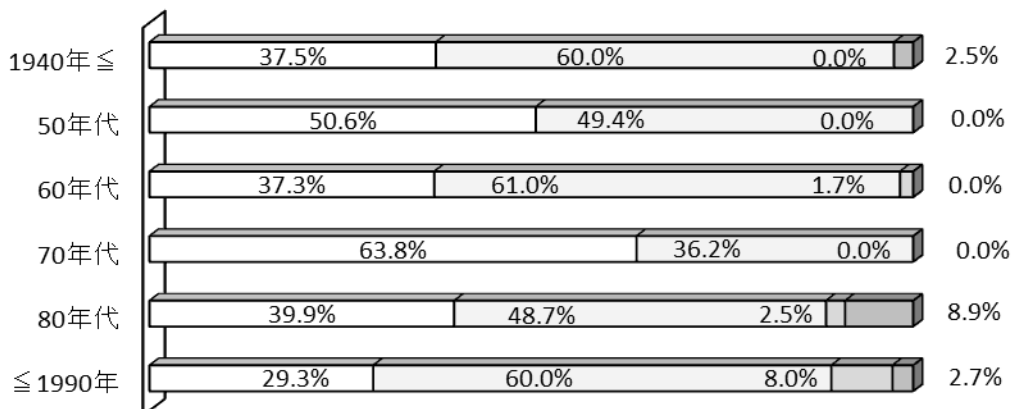


図5 中国の「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」の出生年代別

2012年中華人民共和国（天津市）の一般住民に対して平塚が調査 n=466

4段階を濃淡で、淡い方から順に、良いことだと思いきよく行っている、良いことだと思いが行わない、良いことだと思わないが行っている、良いことだと思わないので行わない

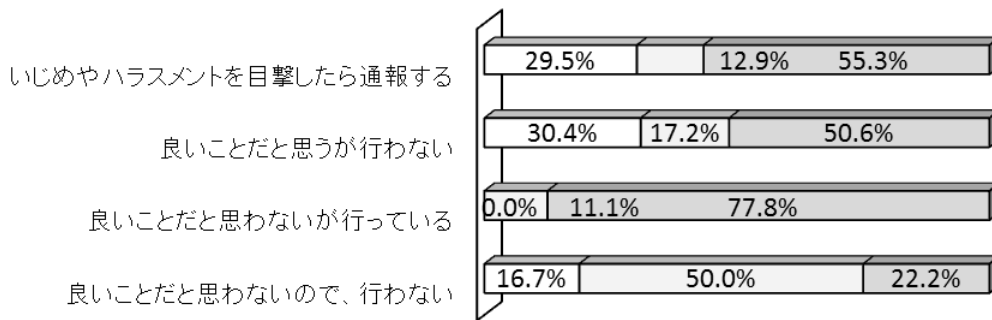


図6 心配事があるって眠れなくなる者のいじめやハラスメントを目撃時の通報行動（日本）、2012年日本の一般住民に対し平塚が調査 n=595  
3段階を濃淡で、心配事があるって眠れなくなる、どちらでもない、心配なく眠れる

なお「良いことだと思わないので、行わない」の割合の最大は1980年代の9.6%で、次いで90年代の2.7%の少数であった。カイ二乗検定において有意差があった(P<0.05)。

### 3-6 「心配事があるって眠れなくなるか否か」と「いじめやハラスメントを目撃時の通報行動」の関係（日本）

図6に示した様に、「心配事があるって眠れない者」の場合は、「良いことだと思うが行わない」の割合が最大で、次いで、「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」、「良いことだと思わないので、行わない」の順で、最小は、「良いことだと思わないが、行っている」であった。

「どちらでもない者」の場合は、「良いことだと思わないので、行わない」の割合が最大で、次いで、「良いことだと思うが行わない」、「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」の順で、最小は「良いことだと思わないが、行っている」であった。

「心配なく眠れる者」の場合は、「良いことだと思わないが、行っている」の割合が最大で、次いで、「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」、「良いことだと思うが行わない」の順で、最小は「良いことだと思わないので、行わない」であった。

### 3-7 「心配事があるって眠れなくなるか否か」と「いじめやハラスメントを目撃時の通報行動」の関係（中国）

中国では、図7に示した様に、「心配事があるって眠れない者」の場合は、「良いことだと思わないが、行っている」の割合が最大で、次いで「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」、「良いことだと思わないので、行わない」、最小は、「良いことだと思うが行わない」であった。

「どちらでもない者」の場合は、「良いことだと思わないが、行っている」の割合が最大で、次いで、「良いことだと思うが行わない」、「良いことだと思わないので、行わない」、最小は、「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」であった。

「心配なく眠れる者」では、「良いことだと思わないので、行わない」、次いで、「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」、「良いことだと思うが行わない」の順で、最小は、「良いことだと思わないが、行っている」であった。

### 3-8 いじめを経験した者の出生推移の男女の比較（日本）

図8における出生年代別は、図1とは若干異なり、最初は1932年ではなく1912~1959年である。

図8に示した様に、男子の場合、いじめの経験のあるものの出生年代別割合は、1912~1959年は

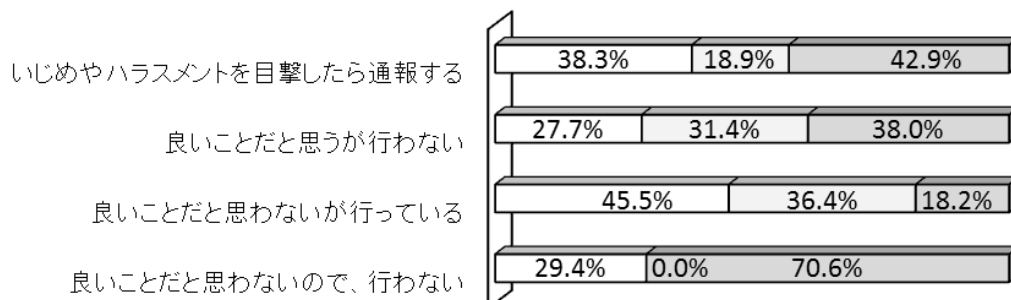


図7 心配事があるって眠れなくなる者のいじめやハラスメントを目撃時の通報行動（中国）2012年中華人民共和国（天津市）の一般住民に対して平塚が調査 n=466  
3段階を濃淡で、心配事があるって眠れなくなる、どちらでもない、心配なく眠れる

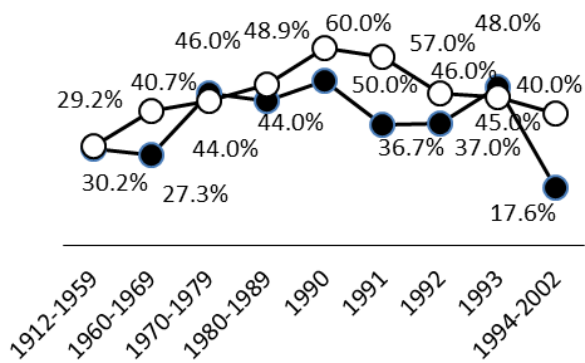


図8 いじめを体験した者の出生推移の男女比較（日本）  
2012年日本の住民に対して平塚が調査 n=777  
●：男性、○：女性。

29.2%であり、1960~1969年には27.3%と僅か減少し、1970~1979年46.2%、1980~1989年44.8%と増加し、1990年では最大値の50.0%に至り、1991年36.7%と減少した後、1992年37.9%、1993年48.0%と再度増加した後、1994~2002年では17.6%と減少し最小値を示した。

女子の場合は、1912~1959年の30.2%より、1960~1969年40.7%、1970~1979年44.9%、1980~1989年48.9%、1990年60.0%と増加の傾向を示した後、1991年57.1%、1992年46.4%、1993年45.3%、1994~2002年では40.0%と減少傾向を示した。

#### 4. 考察

1990年代出生グループはいじめ経験者が最大であった。この時期は、バブル崩壊をきたした昭和60年代から続いた地価・物価の高騰が暴落して、平成不況のはじまりとなった。また、人口増加率は1%台と低下して、少子化が進行した。序論にも述べたように、少子化になると、乳幼児の時代は、周りから必要以上に、手をかけられ、おだてや、励まし、ほめ言葉を与えられるが、やがて成長して小学生や中学生になると明確な実績が伴わないと称賛や承認が得られなくなり、さらに、不況に伴う生活苦の為に、親や子どもの周囲は成長した子どもに対して心を配る余裕を無くしていた。生じて、このような社会では、家族も人間を育てることが難しくなってきた。成長した子ども達は、心を掛けて貰えない、認めて貰えないという蓄積する不満を解消するために、自分より下の存在を探し求めて、いじめを行ったものと思われる。

年上の人との人間関係が築かれると、依存し、充足することによって、満足や信頼関係が生まれる。次に年下の人間関係は自律・セルフコントロールでき、同年との人間関係発達には、仲良くする前に、互いにぶつかり合って、自分の力量を知り、自己や他者認識ができるようになって、自律が出来きて発

達する5)。しかしながら、大人にその余裕が無く、また、少子化により同年齢の友達が少ないと人間関係の発達に問題が生じる。

しかしながら“不登校や引きこもり経験がある”者や、“いじめを経験した者”は、“他人に興味がなく、自分にも興味がない”、“心配事があって眠れない”兆候を有する者の割合が有意に大きかった。

本調査において、「いじめやハラスメントを目撃したら通報するか」の問いに対して、「良いことだと思うし、よく通報している」者の最多は、1970年代の生まれの者に75%と多く、最少は1990年代の生まれの29.7%であった。一方、「良いことだと思うが、行わない」者の最多は1990年生代の生まれの59.5%となり、最少は1970年代の生まれの25%であって、彼ら1979年に始まる「一人っ子政策」の影響を受けた若者は、親の世代とは全く異なる価値観を持ち、消費経済を思うままに謳歌している「新世代の中国人」といわれている4)。「いじめやハラスメントを目撃した時の通報行動」と、「心配事があり眠れない「関係において、「良いことだと思わないので、行わない」行動をとる者に「心配なく、よく眠れる」70.6%と極めて高い値であった。一方、「良いことだと思わないが、行っている」行動をとる者に「心配事があって眠れなくなる」45.5%と高い値を示していた。

日本においても、子どもと親は、考え方や価値観の違いによって、日常生活の中で衝突する場面は少なくない、いじめやハラスメントの経験のある者は1990年代の生まれの者に多く、1992年には少子化が進み、1998年キレル子ども達が多くなった年代である。この攻撃性は、最も不愉快な弱いいじめを引き起こす傾向がある。「心の中に憎悪を抱いた人々は、無力な被害者の苦悩を長引かせることを楽しむ」こと、「知られている限り、他者の苦痛を楽しむのは、人間に特有である」。しかしながら、従来の真のガキ大将は、弱い者いじめはしないし、戦う相手は限られていた。それは腕力を武器に理不尽な振る舞いをしている者に対してであった。その勝負は、必ず一対一であった。

人間は、虐待や差別を受ける苦しみを感じているにも関わらず、一方では解放する方へと回ることがあり、また、一方では苦しみを与える方へと回るといふ二面性を有していて、攻撃心が復讐心を含むようになると憎悪に転じて、憎悪が弱い者いじめへと駆り立てて、暴力や嫌がらせなどによって一方的に苦しめることになる。攻撃者が憎悪を持つようになるのは、自身に恥辱を受けた過去があり、その恥辱に対して復讐しようとする欲求があるからであるとされる7)。1996年（平成8年）に文部大臣は緊急「アピールしているように、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」ものであるとしている。

2007年(平成19年)1月19日以降の定義で、従来のいじめの定義では「自分より弱い者に対して一方的・心理的攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」とした。

いじめは、閉鎖的な集団内で特定の個人に対して発生するもので、教師など外部から実態が把握しにくい分、対策は難しくなる。最近の「いじめ」の傾向は、「共存型グループ」いじめが行われていて、「いじめられている側が、抜け出せない状況にあるのは、取り巻きの多数が「今日の依存グループ」を形成している。家族、社会や、学校、インターネット上においても、大人も子供も取り込まれて、いじめが発生している。

本研究は、日本と中華人民共和国の少子化の要因によって引き起こされる「いじめやハラスメントを目撃したら通報する」ことは「いじめ」の対策の一つの方法である。

現在社会の背景がアイデンティティ喪失を引き起こして、「いじめやハラスメント」を目撃したら通報する行為は、「いじめ対策」として、苦痛を与える行為から他者を解放する行為であり、「いじめを経験した」者(15.3%)は「いじめを経験しない」者(4.6%)よりも多かった。

いじめが発生する直接の原因は、ストレスをためていたリーダー格の子どもの存在であり、そのストレスの原因は、①常に評価にさらされている。②家族が不安定になり、家庭が子どもの癒しの場になっていない。③ダブルスクール状態や過激なスポーツクラブの通いなど過密な生活環境。④対人関係の未熟さからくる、人に対する共感性の減少。そのようなストレスを強くためている子どもが出てくるのは当然のことで、そのような子どもがリーダーとなっていじめが発生する。しかしながら、いじめられた子が転校しても、いじめっ子のストレスは何も解決されることなく、新たないじめられっ子が探され、いじめは繰り返される。ことがあらわしている8)。

いじめは、人格の基本をなす人権の侵害行為である。しかし、仲間同士においては、法律に基づいてその違法性とその責任が判断されることになる。他方で、学校でいじめがあるとすれば、学校は児童生徒をいじめから守る責務を有している。これを子どもから見れば、個々の子どもは、身を守る権利、そして「コミュニケーションの相手として真面目に扱われる権利」を有しており、そしてそれが侵害されたならば、学校に保護を求める権利があるということの意味する。そのことを学校は、児童・生徒に徹底して教えるべきである。

いじめの発生は、現代の社会問題であるにも関わらず、隠ぺい体質があり、放置され、いじめによると考えられる自殺死が社会的に注目されている。この現象は学校だけでなく、会社、地域社会、グループ活動などの集団内で引き起こされている。しかし

ながら、これまでの多くのケースでは学校や教育委員会の生徒指導上の問題にとどまっている。

予防と対策について、ストレス対処は、職場においての、「いじめのコーピング」では、回避スタイル(葛藤を避ける)使用頻度が高いほど、いじめの被害を多く受けている9)。

今後の学校や家庭、地域、子育て教育において、狭小な価値観ではなく、多様な価値観をもち、自己実現に向けて努力している者に、いじめの経験は低い傾向がある。

人間の可能性や潜在的能力を最大限に発揮して、自己の成長を図るとともに、社会全体や人に対しても役立っていきたいと思う欲求である。とりわけ日本は物作り立国として専門性が生かせる仕事に就くことや、世界で、職人として仕事を通して生きることが出来る。世の中に貢献することが出来る。これらを実現することが自己実現である。マズローは、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである」としている。人間の欲求を5段階の階層で理論化した。いじめは人間の基本的欲求は提示から問題が生じている。自己実現されている人間との共通性を見ると、人格が統合されているということである。人格は人格全体として分化が行われて、それが統合されていくという両面を持っている。

なお、いじめの発生は、学校だけでなく、会社、地域社会、グループ活動の集団などでもみられる。

自己実現できている人は、反対のものや両極のどちらかに偏することなく、両方の統合を容易にしているという。一般に心の健康な人は、誰でもこの世界で行われていることを統合する能力を持っている。日中の比較において異なった現われ方になっていることが判明したいじめとは、暴力による「生命・身体・自由・財産」への侵害を継続することにより、あるいは言葉や仲間はずれによる「名誉」・「精神的自由」への侵害を通して、相手から「コミュニケーションの相手として真面目に扱われる権利」を剥奪し、相手の人格を否定しようとする行為である。すなわちいじめは、二重の人権侵害であり、前者の人権侵害をとおして人格そのものを攻撃するところにその本質がある。

日本においての、いじめ問題の対策は「いじめられっ子対策」となっているが、他の国々では、「いじめっ子対策」になっている。学校や地域、家庭の連携の下での、今後の課題である。

#### 参考文献

- [1] 速水敏彦、他人を見下す若者たち、講談社、2006年2月。
- [2] 河合隼雄、人間の心と法、有斐閣、2003年9月
- [3] 三河さつき、別冊宝島1670号、2010年日本vs中国、2010年1月
- [4] 梁 過、現代中国「解体」新書、講談社、2011年6月
- [5] 平塚儒子、「社会的脱落層」とストレスサイン、時潮

社、.: 2007年9月

- [6] 吉川武彦、精神保健マニュアル、南山堂、2003、
- [7] 渋谷昌三、面白いほどよくわかる深層心理(平成21年)
- [8] 原田正文、小学生の心が見える本—不登校・キレル・いじめ・学級崩壊はなぜ、農山漁村文化協会、2007年3月
- [9] 加藤 司、対人ストレスコーピング、2008年4月